

1. 問題の設定、及び研究の概要について

本論文全体の被説明変数は、産業集積において観察される「柔軟な連結」という事象である。「柔軟な連結」とは、需要や生産条件がさまざまに変容しても、企業外部の能力・資源とのつながり方が状況変化に適合すべく迅速に見いだされ、複数企業の結びつきの効果によって、高いパフォーマンスが維持されることである。企業の境界を越えて、複数企業が共通利用可能な資源を互いに使い合い、補完し合うことによって、連結の相補効果や相乗効果が発生し、単独では発揮できないような高いパフォーマンスが発生するという現象が可能になるプロセスを、「産業集積」を構成する群に着目して検討する。

本論が考察の対象とするのは、主として、日本の大田区（東京都）の分業集積群であり、これに加えて、イタリアのボローニャの分業集積群も扱う。筆者の研究のために直接に相互作用の相手をしてくださった、2つの産業集積に関係する企業数は、大田区で73社、ボローニャでは20社に及ぶ。中には、幾度も足を運ばせていただいたところもある。本研究の方法上の特徴は、現場の人々との直接の相互作用を大切に、文化人類学的な参与観察の手法を取り入れたことにある。現場では、言葉で聞き答えるだけでなく、現場の様子を五感をフルに用いて観察した。単に相手の言葉だけを記録するのではなく、しぐさや表情の変化、また空間を構成するモノや音といったものも、できるかぎり記録した。また、インタビュー時に現場に居合わせた、得意先や発注先の方、機械商社の方、銀行の方等にも、しばしば、調査に参加いただいた。このような、現場の生きた、細部をとらえた情報をベースに、産業集積における「柔軟な連結」の達成プロセスをとらえる論理を育てようと努力したところに、本研究の独自性の源がある。

「柔軟な連結」という事象のポイントは、何でも自分で抱え込むのではなく、外部主体との組合せが生み出す経済性で勝負するという点にある。このエッセンスは、「連結の経済性」という概念で表現することができる。「連結の経済性」とは、種々の製品展開に必要とさまざまな分業単位を、一つの企業がまとめて抱え込み生産・販売するよりも、ある程度の自律性を保った複数企業が共に連携し生産・販売する方が、コストが小さくてすむことである。

本論で用いる「柔軟な連結」概念と、ピオーレ&セーブルによる「柔軟な分業（フレキシブル・スペシャリゼーション）」概念とは、基本的には同じ概念である。2つの概念は、何でも自分で抱え込むのではなく、外部主体との組合せによる連結の経済性で勝負するというエッセンスを共有する。まずは細かな分業がある。分業というのは、仕事を分けることである。その分けた後の連結プロセスに特に着目したいので、本論では「柔軟な連結」という言葉を用いる。

産業集積における「柔軟な連結」の達成プロセスを考えていくにあたって、本論では「場」のパラダイムの視点から、対象にアプローチしていく。「場」とは、人々が空間を共有し、意識的にまたは無意識的に情報的相互作用するとき、自己が外部とつながりを持つ、その共有空間の有する特有の状況のことである。空間を共有した情報的相互作用とは、その空間への参加者が相互に観察し、コミュニケーションを行い、相互に働きかけ合いながら共通の体験をすることを意味している。

「場」のパラダイムというものの見方の特徴とは、次の3点を指摘することができる。第1に、空間を共有した状況が、場の定義の中核にある。人々が共有した何かしらの空間が、人々間の情報的な相互作用が起きる「容れもの」あるいは「焦点」として重要な役割を果たしている。第2に、主体間の関係性の上での共通資源の蓄積・累積に着目する。相互作用の共通基盤となる資源の存在が、仕事の文脈として重要な役割を果たすと考えるのである。第3に、このような仕事の文脈形成プロセスには、自己組織的な要素が含まれることへ着目する。誰かがすべてをデザインしたり命令したりして全体の何かが生まれるのではなく、流れの中で「自然」にことが起きていくという要素が加わっているということの大切さを考えようとする。意図と偶然の出会い、計画と創発の出会いの上で、将来の仕事の文脈が形成される。以上のような特性を持った視点から、本研究は、産業集積における町工場の活動に分析の光をあてる。

大田区町工場の世界の「柔軟な連結」の特性を表現する言葉として、少しこねられない表現であるが、都市経済学者ジェイコブスの「即興演奏」をお借りし、検討を進める。「即興演奏」とは、不意にテーマを与えられても、即座に状況に適した曲目（すなわち、品物）を高い水準で提供してみせることである。このような別の概念を設定する理由は、「柔軟な連結」とは相当広範囲の現象を含みうる概念なのであり、例えば、「柔軟な連結」概念には、トヨタのサプライヤー群の連結も、大田区町工場群の連結も含まれ、このままでは、被説明変数概念に対応するイメージの範囲が広すぎて扱いつづらいためである。したがって、より、大田区の方業集積群の特性を表現した「即興演奏」を用いる。

大田区町工場の連結とは、「即興演奏」のメタファーを用いて表現するならば、次のようなものである。多様な顧客からのさまざまな要望を受けて、まわりの独自の活動をしている知り合いの中から、ふさわしい楽器と技（すなわち、設備や道具、技能や知恵）を持つところに声をかけ参加をお願いし、彼らの反応を見ながらただちに演奏の基本方針を定める。演奏途中でも必要あらばすぐさまに密な相互連絡をとり、細やかな調整を加え、限られた時間とコストの制約条件の中で巧みなバンド演奏を顧客に提供する。——このように、限られた時間とコストの余裕の中で伸縮自在に連結のあり方を変化させ、工夫を加え、ふつうならちょっとできないよと尻込みしたくなるような、顧客からの要望や生産条件の変化にも、フレキシブルに応えられるということが、大田区町工場ならではの得意技なのである。しかも、それが一回限りの曲目演奏でなく、多様な曲目を演奏していくプロセスとして競争が争われている。他の主体との連携による「質の高い即興演奏の連続的提供」が、大田区町工場群の持ち味なのである。

なぜ、大田区町工場の人々は、「質の高い即興演奏の連続的提供」が可能なのだろうか。——本論文全体は9つの章から構成されるが、この問いについては、全体の屋台骨を構成することになる第4章から第6章までで検討することになる。

本論の構成は、以下の通りである。まず、次章以下の議論の準備として、第2章の前半では、「産業集積」とはどういったものなのかについての大きなデッサンをおこなう。本論の焦点のあて方は、産業集積全体のしくみの中でいかなる位置づけにあるのかを理解するためである。さらに第2章の後半では、「連結の経済

性」概念について吟味する。「連結の経済性」には、「連結の相補効果」だけでなく、「連結の相乗効果」があり、これら2つの効果の本質と発生プロセスについて、具体的イメージを持って整理する。

第3章では、大田区産業集積の基本的現実理解を整理する。まず第1節で、現在の大田区産業集積の分業と連結の実態を、統計やアンケート調査の数字を踏まえつつかむ。第2節では、現在のような得意技を持つ産業集積へと大田区が発展してきた歴史の変遷について簡潔に整理する。

第4章から第6章までは、なぜ、大田区町工場の人々は、需要や生産条件がさまざまに変容しても、状況変化に応じた質の高い「即興演奏」を連続的に提供することができるのかという問いについて検討する。この問いに対しては、3段階構えで分析の竹刀を振り下ろすことにする。

まず、初めの第4章では、上述のなぜに対して、町工場の人々自身が最もよく答えてくれる方向から、すなわち、町工場の熟練の観点から切り込む。この章のキーワードは「知的熟練」であり、それが質の高い「即興演奏」の提供のために果たす本質的役割を再検討する。

次の第5章の分析の竹刀は、「知的熟練」を取り巻く人々の関係性に着目し、町工場の世界のコーディネーション・プロセスという視角から振り下ろす。コーディネーション活動を、だれに仕事ををお願いするかを選ぶ段階と、仕事のプロセスをマネジしていくまとめる段階に分け、考察する。この章のキーワードは、「信頼のネットワーク」「ズラシ」「場の情報」である。

第5章までの検討によって、質の高い「即興演奏」の提供ということについては、相当概念の準備が整うが、そのようなことがなぜ、「連続的に」提供可能かという疑問について答えられていない。そこで、その部分について、相互学習の観点から捉え直すのが、次の第6章の課題である。考察のカギは、彼らが日常活動のプロセスで、互いに共通利用可能な資源の大きな蓄積をなしていることにある。この章の一番のキーワードは、関係的な共通基盤と一般的な共通基盤から構成される、連結の「共通基盤」である。

第7章と第8章では、6章までの現実と論理の整理を踏まえて、思考を飛ばたかす。第7章では現実理解に向けて、第8章では理論理解に向けて飛ばたく。第7章では、大田区町工場の世界を考え続けてきた筆者であるからこそ、ポーランドの町工場の世界での連結活動について見えることについて、仮説発見的に述べる。第8章では、社会的相互作用の場としての括弧付きの「市場」がはたらくプロセス理解への洞察を述べる。前章までは「産業集積」という具体的なものに着目して議論を展開してきたが、第8章では、もう一レベル思考の抽象度を上げ「市場」について考察する。実態としての「市場」は、本来、経済活動に直接関係する社会のことである。新古典派の描く市場のように、単なる記号のごとき価格機構だけで構成されるのではない。それは、確かに市場を構成する重要な部分の一つではあるが、しかしやはり部分なのである。社会的相互作用の場としての「市場」は、価格機構による自動調整の新古典派的な市場と何が違うのだろうか。

そして、第9章において、結論としてここまでの議論を要約し、これからの課題とは何であると考えているのかについて述べる。

2. 論文の最重要のキー概念:「知的熟練」、「場の情報」、「共通基盤」

本論文で特に重要なキー概念は、「知的熟練」(第4章)、「場の情報」(第5章)、そして「共通基盤」(第6章)である。これらは、「何をつくるか」「どう仕事を分けるのか」「分業単位の連結のあり方をどうつくるのか」といった、分業と連結のそもそもの根本を問い直すようなダイナミックな変化を含む「柔軟な連結」が達成されるプロセスを理解するために、不可欠な概念である。

「知的熟練」とは、仕事の内容が多様に変化したり、ふつうでない状況が発生したりしても、仕事の根本に流れる原理のようなものに立ち返って、仕事の流れの組み方、道具の使い方、材料の生かし方等を工夫し、必要な品物を作り上げる能力のことである。小池が提唱したこの概念を、本論は、企業の境界を超えて相互作用をおこなう人々の関係性の面からとらえなおす。「知的熟練」は、自分や他者が蓄積してきた過去の経験、知識を、多種多様な文脈へと転用するために必要な追加コストを、根本原理に立ち返って「節約する」工夫を生み出すという、「柔軟な連結」達成のための重要な機能を果たす。

第2のキーワード「場の情報」とは、自己が、空間を共有する他者やモノとの関わりの中で、五感や運動感覚といった諸感覚を連動して獲得する情報のことである。単なる記号の連なりとしての形式情報とは異なり、色や形のニュアンス、肌触り、温度、動きの方向性や、音や振動のリズム等を含んだ情報である。「場の情報」は、「柔軟な連結」の選ぶコーディネーション、まとめるコーディネーションが、ともにフレキシブルにおこなわれるために、不可欠な役割を果たす。選ぶコーディネーションの側面では、「場の情報」は、仕事の実行プロセスで相手が示すであろう能力や意図を、的確にフレキシブルに判断することを支える。この「場の情報」を、いざという時のために、日常から備え蓄えておくのが、「信頼のネットワーク」の役割である。

まとめるコーディネーションの側面では、「場の情報」は、相互作用の中で「ズラシ」をつくり出せるために、とても大切になる。「ズラシ」とは、予め想定された仕事のやり方とは部分的に異なる要素を含んだ、別の仕事のやり方が生まれることである。相互作用の中で、人々の頭の中にある、前提条件、視点、思考の材料等の中の一部が組み変わることによって、仕事のやり方の「ズラシ」が生まれてくる。ずれているだけだから、前のものも残る。したがって、全体の資源蓄積が大きくなる。この「ズラシ」が生まれてくるために、コーディネーション・プロセスにおける「場の情報」の役割がいかなるものかの説明が、第5章の中で最も重要なポイントである。

第3のキーワード、「共通基盤」とは、ある程度の自律性を持った複数主体が連携し協働するための、コミュニケーションとモチベーションの基礎的土台を人々の間に提供する、基盤的情報財のことである。①信頼の関係、②情報解釈コード、③価値基準が、その主な構成要素である。「共通基盤」は「一般的な共通基盤」と「関係的な共通基盤」から構成されるが、町工場の「共通基盤」の基本は、「関係的な共通基盤」、すなわち、相手と共通経験を積み重ねるプロセスから生まれてくる、主体と主体の関係の上にある基盤的情報財にある。

従来、モノづくりとコーディネーションは、別々の異なるテーマとして扱われてきた。これら2つを互いに有機的関係のある領域として、本論は頭の整理箱を組み替えることをおこなうが、それを可能にするカギは、この「共通基盤」が、連結のコーディネーション活動に於ける基礎的土台であるだけでなく、相互学習にとってもエッセンシャルな基礎的土台であることにある。第6章において、前章までの概念準備を踏まえておこなう、

「共通基盤」のはたらきについて議論した部分は、本論文全体の中での最大の肝となる。この肝は、博士論文中の図6-2としてまとめている。

以上のような概念を用いて、本論文では、産業集積における「柔軟な連結」の達成プロセスの検討を通して、産業集積の本質的な意味について考える。本論文は、筆者の「産業集積の群としての存続可能性」を考えるという、より長期的テーマの中、次への出発点となる論文であるが、ご拝読いただければ、大変うれしく思う。